

演習 1

2班 A07CB052 A07CB063 A07CB091
A07CB099 06P104 A08CB502

大学内の友人関係との心的距離と孤独感との関連

キーワード：友人関係 心的距離 孤独感

I. 問題

人と人との関係は、さまざまある。親子との関係、男女との関係、友人との関係、会社内での関係、などが考えられる。その中でも、私たち大学生にとっての大学内での人間関係である、友人との関係に着目していくことにする。友人との関係は、何でも話し合えるという人もいれば、友人であっても踏み込んでほしくない領域があるという人もいる。同じように接していても相手に対する心の距離は人によって違うだろう。また、誰かと一緒に居たい、常に人とつながっていたい、つまり一人で居ることが孤独でたまらないと感じる、こういった人もいるのではないか。人との心のつながりと孤独感が何らかの関連があるのではないかとし、調べていく。

岡田（1995）によれば、青年は友人の中に内面的なかかわりを避け、表面的な楽しさを求めている。また、青年自身は同性の親しい友人と親密に関わるということに近い意識もっている。さらに、友人関係においては、内面的関係を求めようとしているが、現実には内面的なかかわりを避け、表面的な楽しさを求める傾向に近い関わり方をしていると述べている。

藤井（2001）は、近年の心理的距離をめぐる研究では青年期の友人関係における心理的距離のとり方について、新たな距離のとり方を見出すことが、友人との心理的距離をめぐって生じる葛藤や問題の解決への糸口であると捉え、心理的距離そのものに焦点を当て、その構造分析を試みている。時には融合状態といえるまで相手と強く結びつき、時にはお互いのペースを尊重して一人でいることもあり、心理的距離のとり方とは本来力動的・流動的であり、柔軟性の次元が心理的要因であるとしている。現代の大学生においては、近づいたり遠ざかったりを柔軟に繰り返す距離のとり方を理想としながらも、現実には表面的な関係でい続けることでトラブルを回避し、柔軟な関係を築いていると認知している姿がうかがえる。

西川（2003）は、現実の生活場面での依存感情や依存欲求をいかに表出するか、いかに抑制するかといった自己制御のあり方を検討し、自己制御の未熟さは仲間への過剰な依存や一体化とつながり、仲間の離反をまねき、その孤独感や孤立感が依存性を高めるであろうと示唆している。

今回、研究する友人関係は、大学内での友人を対象にしたものである。先行研究を見てもこのように限定し研究したものは見られなかった。大学内で同じ授業を受け、多くの人が日中の大半を過ごしている友人との関係を対象にすることは新しい観点であるといえるだろう。

II.目的

今回、友人関係の心の距離を調べるために、『友人との心的距離』尺度を作成し5件法を用いて質問紙を作り、友人との心的距離を測定し、改訂版 UCLA 孤独感尺度日本版(諸井1991)との関係を調べることを目的とする。自分たちで作成した尺度によって測られるものと、既存尺度によって測られるものとの間に関連があるかどうかを調べる。

III.仮説

大学内において人との繋がりを求めようとする人ほど孤独感尺度が高いのではないか。また、世渡りのうまい人はスムーズに人間関係が築けることで、孤独感尺度が低いのではないか。

IV.方法

調査対象者および調査時期

愛知県内の私立大学の女子大学生 74 名を対象に、質問紙調査を行った。有効回答数は 70 名、平均年齢 20.84 歳、標準偏差は.81 であった。調査は、2009 年 11 月 16 日大学の講義時間内に配布し集団法、および調査者が各自配布し行った。

調査内容 1. 友人との心的距離尺度

女子大生 6 名より自由記述を収集して作成した 19 項目の尺度を使用した。下位尺度は、表面的尺度、信頼尺度、つながり尺度、世渡り尺度の 4 つで構成された。これらの項目に対して、1=「ほとんどあてはまらない」、2=「あまりあてはまらない」、3=「どちらでもない」、4=「あてはまる」、5=「かなりあてはまる」の 5 段階評価で回答を求めた。

Table1 大学の友人との心的距離質問紙の項目案

[表面]

- ・ 大学の友人と大学外で遊ぶことがない。
- ・ 気の合わない人とも一緒にいることが平気である
- ・ どの大学の友人とも同じ態度で接する
- ☆ 大学の友人と深く付き合う方である
- ・ 大学の友人には自分の素を見せられない

[信頼]

- ・ 大学に親友と呼べる人がいる

- ・ 大学に悩みを打ち明けられる友人がいる
- ☆ 大学の友人は素の私を知らない
- ・ 大学の友人の性格を理解できている
- ・ 最も頼れるのは大学の友人である
- ・ 大学の友人は私の性格を理解できている

[つながり]

- ・ 毎日大学の友人とメールをする
- ☆ 大学内で周りを気にせず一人で昼食を食べていても平気である
- ・ 大学の友達とお揃いのものを持っていたい
- ・ 大学の友人からのメールの返信が遅いと不安である
- ・ 大学内で常に同じ友人と過ごしている

[世渡り]

- ・ 大学内でグループを使い分けている
- ・ 大学内で誰とでも話を合わせられる
- ☆ 大学の友人と些細なことでけんかをしてしまう
- ☆ は逆転項目

調査内容 2. 孤独感尺度

「改訂版 UCLA 孤独感尺度日本版」を用いた。この尺度は、人間関係の中でわれわれがこうありたいという願望があるときに、その願望が十分に満たされなかったり、逆に心理的な満足感を低下させたりするような結果が生じたときに感じる感情の 1 つと定義されているものであった。1=「けっして感じない」、2=「どちらかといえば感じない」、3=「どちらかといえば感じる」、4=「たびたび感じる」の 4 段階評価で回答を求めた。

Table2 改訂版 UCLA 孤独感尺度日本版(諸井 1991)

1. 私は自分の周囲の人たちと調子よくいっている。(逆転項目)
2. 私は、人とのつきあいがいい。
3. 私には、頼りにできる人がだれもない。
4. 私は、ひとりぼっちではない。(逆転項目)
5. 私は、親しい仲間達のなかで欠くことのできない存在である。(逆転項目)
6. 私は、自分の周囲の人たちと共通点が多い。(逆転項目)
7. 私は、今、誰とも親しくしていない。
8. 私の興味や考えは、私の周囲の人たちとはちがう。
9. 私は、外出好きの人間である。(逆転項目)
10. 私には、親密感の持てる人たちがいる。(逆転項目)
11. 私は無視されている。

- 12.私の社会的なつながりはうわべだけのものである。
- 13.私をよく知っている人はだれもいない。
- 14.私は、他の人たちから孤立している。
- 15.私は、望むときにはいつでも、人とつきあうことができる。(逆転項目)
- 16.私には、私を本当に理解してくれる人たちがいる。(逆転項目)
- 17.私は、たいへん引っ込み思案なのでみじめである。
- 18.私には、知人はいるが、私と同じ考えの人はいない。
- 19.私には、話しかけることのできる人たちがいる。(逆転項目)
- 20.私には、頼りにできる人たちがいる。(逆転項目)

V.結果

尺度項目の平均値と標準偏差を算出し、分析を行った。大学の友人との心的距離尺度の項目間に天井効果が見られたものは「大学の友人と些細なことではけんかをしてしまう」「大学内で常に同じ友人と過ごしている」「大学に悩みを打ち明けられる友人がいる」の3項目であった。また、フロア効果が見られたものは、「毎日大学の友人とメールをする」「大学の友達とお揃いのものを持っていたい」「大学の友人からのメールの返信が遅いと不安である」の3項目であった。

次に残りの13項目に対して主因子法による因子分析を行った。固有値の変化は3.91、1.77、1.07 というものであり、3因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度3因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子付加量を示さなかった3項目を分析から除外し、再度主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関をTable3に示した。なお、回転前の3因子で10項目の全分散を説明する割合は24.06%であった。

第1因子は「大学の友人は私の性格を理解できている」、「大学の友人は素の私を知らない」、「大学の友人の性格を理解できている」の3項目で構成されており、自分と友人相互の理解をみる項目が示された。そこで、因子名を「理解」とした。

第2因子は「大学に親友と呼べる人がいる」、「大学内で周りを気にせず一人で昼食をたべていても平気である」、「最も頼れるのは大学の友人である」、「大学内でグループを使っている」の4項目で構成されており、人との心的なつながりをみる項目で構成されたため、因子名を「つながり」とした。

第3因子は「大学内で誰とでも話を合わせられる」、「気の合わない人とも一緒にいることが平気である」、「どの大学の友人とも同じ態度で接する」の3項目で構成された。第3因子では友人との接し方をみる項目で構成されたため、因子名を「表面的」とした。

Table3 大学の友人との心的距離尺度の因子分析の結果(主因子法 Promax回転)

No.	I	II	III	M	SD
【I. 理解】					
8 大学の友人は私の性格を理解できている。	1.03	-.21	-.13	3.44	1.10
18 大学の友人の性格を理解できている。	.70	-.03	.15	3.61	.91
*9 大学の友人は素の私を知らない。	.52	.20	.01	3.34	1.23
【II. つながり】					
15 最も頼れるのは大学の友人である。	.17	.62	-.04	2.81	1.21
11 大学に親友と呼べる人がいる。	.23	.56	.10	3.46	1.38
*12 大学内で周りを気にせず一人で昼食を食べていても平気である。	-.03	.50	-.08	2.49	1.38
17 大学内でグループの使い分けをしている。	-.23	.42	-.02	2.80	1.33
【III. 表面的】					
7 気の合わない人とも一緒にいることが平気である。	-.04	-.14	.59	2.59	1.21
13 どの大学の友人とも同じ態度で接する。	.06	-.08	.53	3.20	1.11
2 大学内の誰とでも話を合わせられる。	-.01	.12	.49	3.27	1.09

*逆転項目

心的距離尺度の3つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「理解」下位尺度得点(平均 7.99, SD 2.24), 「つながり」下位尺度得点(平均 9.46, SD 3.13), 「表面的」下位尺度得点(平均 6.92, SD 2.00)とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ「理解」で $\alpha=.77$ で十分な値は得られた。「つながり」で $\alpha=.59$ 「表面」で $\alpha=.53$ と数値が低く十分な値が得られなかった。

また、上記の大学の友人との心的距離尺度の因子間相関、 α 係数、平均、SDをまとめたものをTable 4に示した。

Table4 大学の友人との心的距離尺度の因子間相関

	つながり	表面的	α	M	SD
理解	.45	.13	.77	7.99	2.24
つながり	-	.05	.59	9.46	3.13
表面的	-	-	.53	6.92	2.00

大学の友人との心的距離尺度と孤独感の相関

孤独感尺度の平均値を算出し、「孤独」下位尺度得点(平均 35.59, SD 9.66)とした。内的整合性を検討するために下位尺度の α 係数を算出したところ「孤独」で $\alpha=.92$ で十分な結果が得られた。

また、大学生の友人との心的距離の下位尺度と孤独感尺度の相関関係を確認するため、

相関係数を求めた。その結果、「理解」尺度と孤独感の間には、 $r = -.47$ 、「つながり」尺度と孤独感の相関係数は、 $r = .34$ 、「表面的」と孤独感の間には $r = .43$ であった。

Table5 孤独感と大学の友人との心的距離の各下位尺度間の相関係数

	理解	つながり	表面的
孤独	-.473**	-.338**	-.432**

** $p < 0.01$

大学生の友人との心的距離尺度の下位尺度「理解」と孤独との間に負の相関が得られた。また、「つながり」と孤独との間にも負の相関が得られた。「表面的」と孤独の間にも負の相関が得られた。

VI. 考察

大学生の心的距離尺度分析

今回作成した尺度には、天井効果が3項目であった。「大学の友人と些細なことでけんかをしてしまう」この項目は、「世渡り」の項目として用意した逆転項目であった。大学の友人とは、けんかをする人が少ないことや、大学生としての自覚、岡田(1999)の内面的関係を求めようとしているが、現実には内面的なかかわりを避け、表面的な楽しさを求める傾向があるということが反映された結果ではないか。「大学内で常に同じ友人と過ごしている」この項目は、「つながり」の項目として用意したものであった。「大学に悩みを打ち明けられる友人がいる」この項目は、「信頼」の項目として用意したものであった。この二つの項目は、平均年齢が20.81歳と主に大学3・4年生に答えてもらった。大学生活の中でも友人関係は、形成されてきているため、同じ友人と過ごしている人が多いのではないかと考えられる。

また、フロア効果は3項目であった。「毎日大学の友人とメールをする」「大学の友人からのメールの返信が遅いと不安である」この項目は「つながり」の項目として用意したものであった。この結果から、大学という毎日会う友人ということで、メールをする必要がないと考える人が多いと推測された。「大学の友達とお揃いのものを持っていたい」この項目は「つながり」の項目として用意したものであった。根本的にお揃いのものを持っていたいのだろうか、という疑問が出てきた。考えてみると、持ちたいと考える大学生自体が少ないと思われ、質問項目の作成の段階で考慮に入れなかったことにより、フロア効果が出てきてしまったのではないかと考えられた。

大学生の友人との心的距離尺度の因子分析の結果、仮説として立てた4因子構造は十分に認められなかった。まず、「世渡り」を表している因子は認められなかった。また、「信頼」を表している因子も認められなかった。しかし、友人のことをよく知っている項目が多く見られた「理解」という因子がみられた。「つながり」という因子の中には、「表面的」、「信頼」、「世渡り」として想定した項目が混在する結果となった。

大学生の心的距離尺度と孤独感尺度の概念の関係について

大学生の友人との心的距離尺度の下位項目と孤独感尺度には、「理解」、「つながり」、「表面的」との間にも負の相関が得られた。「理解」では、相手のことをよく理解していることで、

孤独を感じにくいと考えられ、負の相関関係が得られたのではないかと思われた。また、「つながり」では、大学内において人との繋がりを求めようとする人ほど孤独感尺度が高いのではないかと仮説を立てたが反対の結果が得られた。これは、友人とつながっているという安心感から、孤独を感じにくいのではないかと考えられ、負の相関関係が得られたのではないかと思われた。「表面的」では、人間関係がスムーズに行く人ほど孤独を感じるものが少なく、人間関係が良好でない人ほど孤独を感じているという傾向であるのではないかと思われた。そのため、負の相関であったと考えられた。

今後の課題

今回、友人関係の心の距離を調べるために、『友人との心的距離』尺度を作成し5件法を用いて質問紙を作り、友人との心的距離を測定した。しかし、想定した下位尺度で分かれず、質問項目が混在する結果であった。これは、すべてに共通するような質問内容であった点、大学生の発達段階では考えられない質問項目であったため、フロア効果や天井効果、また想定したものと違う結果が出たのではないかと考えられた。

また、本調査では大学内における友人関係に着目したが、大学外で同内容の調査を行うことで、より深く友人関係の心的距離をみることができるとし、今後の調査が必要であると考えられた。

【出典文献・関連文献】

- 藤井恭子 (2001) 大学生の友人関係における心理的距離のとり方 茨城県立医療大学紀要 6,69-78
- 堀洋道 監修 山本真理子 編 (2001) 心理測定尺度集 I - 人間の内面を探る(自己・個人内過程) -,222-225
- 諸井克英 (1991) 改訂 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討 静岡大学文学部人文論集,42,23-51
- 西川隆蔵 (2003) 対人依存行動の研究—対人依存の事故制御と自己意識、ソーシャルスキル、及び対人適応感との関係の検討— 人間文化学部研究年報
- 岡田努 (1999) 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究,47,432-439
- Russell,D.,Pep:au,L.A,&Cutrona,C.E. (1980) The revised UCLA loneliness scale:Concurrent and discriinant validity ebidence.Journal of Personality and Social Psychology,39,472-480